

麓地区（富士朝霧高原）における参加協働型の地域づくりについて

○権田 浩康（東京農業大学） 今井 健（東京農業大学大学院）
木村 悦之（東京農業大学非常勤講師） △麻生 恵（東京農業大学）

対象地である静岡県富士宮市北部の麓地区は、富士山の西麓に広がる朝霧高原の一角に位置している。対象地区の東半分の平坦地は東京農業大学が60年に渡って畜産農場として整備・使用し、美しい牧草地の景観を生み出してきた。同地区は平成17年に地元に戻還され、現在、自然体験（学習）施設「ふもとっばら」として運営されている。

同地区は大変恵まれた地域資源を有する場所でありながら、現状ではそれらが十分活用されているとは言い難い状況にある。また他方で、良好なレクリエーション空間の創出や、市民の地域づくりへの参画の関心が高まっている状況もあり、それらの市民の要求と地元の土地利用の担い手不足の両方を満たすものとして「参加協働型の地域づくり」が必要とされている。

本報告では、①東京農業大学エクステンションセンターのプログラムとして行っている、社会人・学生・地元住民の3者参加のワークショップ・景観整備作業の活動報告と、②地域活性化に多様な主体の意見を導入し、市民や地元住民が直接参画を行っていくことの可能性の考察、以上の2点を行った。